



アザラシ誘引具

イヌイト

アラスカ

長さ 左 29.8 cm, 右 25.9 cm

第8回 北方民族文化シンポジウム

当館を管理運営している財団法人北方文化振興協会と、オホーツク国際流氷ロード網走市実行委員会が主催する北方民族文化シンポジウムを、11月9、11、12日の日程で、網走市内のホテルを会場に開催しました。

9日は『日本人はどこから来たか』というテーマで、大阪医科大学学長の松本秀雄氏が講演しました。血液遺伝学を専門とする松本氏は、30数年の間に血液型の一つであるGm型から、世界中のいわゆる「蒙古系民族」の移動の跡をたどり、その分布や流れによって、日本民族のルーツの解明を行ってきました。スライドを使いながらの講演では、「蒙古系民族」は北方型と南方型に分けられ、日本民族は北方型に属し、そのルーツはバイ



カル湖畔にあると言うことをお話しされました。

11、12日のシンポジウムは、『北方針葉樹林帯の人と文化』をテーマに、9人のパネリストによる発表と討論を行ないました。今回のシンポジウムの目的は、ユーラシア、北アメリカの北方針葉樹林帯の民族文化の成立過程とそれぞれの民族文化を比較検討し、この地域の文化の本質を明らかにすることと、日本とその周辺における北方森林的な文化要素についてもあわせて検討することでした。

以下に、シンポジウムでの発表の概略を紹介します。

齋藤晨二氏（名古屋市立大学）

「シベリアのタイガと先住民文化」

シベリアの北極圏は、ツンドラで樹木のない、湿地性の苔類、草類の生える地域である。その南、7月の平均気温が15度以上の地域になると、針葉樹林帯のタイガである。範囲は、北は北極圏から南はシベリア南限の山地までという広大な面積をもつ。タイガ地帯に人類が居住するために重要なのは食物の獲得である。タイガの植生では野イチゴ類、草の根、松の実などを除くと食糧となるものは多くはない。一方鳥類、ほ乳類、魚類はきわめて豊富であり、人類のより安定したタイガでの生活は弓・ワナの発明改良とトナカイ飼育、動物狩猟、及び河川漁撈によって保障してきた。極北の伝統的な生活様式は、タイガとツンドラにまたがるトナカイ飼育と狩猟、漁撈を基盤としてきた。つまり、北方針葉樹林帯（タイガ）の文化はその北のツンドラ地帯の文化とは、区分して扱うことはできないのではないだろうか。

E.ジェームス・ディクソン氏

（アラスカ大学博物館）

「ベーリングニア東部の北方針葉樹林帯における先史文化に関する解釈的アプローチ」

内陸アラスカの北方針葉樹林帯の先史文化は次の6つの時期に区分される。つまり古い方から、ネナナ複合、古極北伝統、北方パレオインディアン伝統、北方アーケイック伝統、後期デナリ伝統、アサパスカン伝統である。この継続した文化には、完新世におけるアジアと北部アメリカの石器製作の影響が明らかである。（スライドにより各文化段階の石器を紹介）。また、文化変化は環境変化とともに見て行かなければならない。このことから、内陸だけを見ていただけでは全体の文化の流れをつかむことはできない。北方針葉樹林帯の先史文化は、その地域のみならず周辺地域（具体的には沿岸部）の自然環境、生態系と関連して考えなければならない。なぜならばこれらはその地域の人び

との生活に大きな影響を与えてきたからである。

パトリシア A. マコーマック氏

(アルバータ州立博物館)

「ブッシュとタウンの結合—フォート・チップワイアンにおける先住民の複合経済—」

カナダ北西部の針葉樹林帯のフォート・チップワイアンでは古くから、フランスやスコットランドから商人がきて交易所を作り、インディアンと交易をしていた。先住のインディアン（チップワイアン、クリー）はそれまで自分たちだけのために狩猟をしていたが、交易所が作られることによって交易のための狩猟をするようになった。人びとは交易所のある「タウン」とその周辺の「ブッシュ」と呼ばれる地域に暮らし、カリブー、ムース、バイソンやその他の中小動物などを狩猟するばかりではなく、タウンにおいて商品運搬や家畜の世話などで賃金を得ていた。このような経済形態を「複合経済」と呼ぶ。

1950年から60年にかけてブッシュでの複合経済に変化が現れる。その理由は毛皮の取引きが減少したことである。そして漁業や鉱業といった新しい産業が生まれた。このことによって人びとの生活は近代化したが、伝統文化は依然として生きづいている。

梶原 洋氏（東北福祉大学）

「日本海沿岸地域における更新世末から完新世初期の移行期の文化について」

今から約2万年前、最終氷期後半の寒冷期が終わり、温暖化が始まる。この頃シベリア東部で発展する細石刃文化にはクサビ型の細石核、骨製の植刃器が伴う。人びとはトナカイ、ウマ、野牛を狩猟していた。極東、沿海州地域では更新世末の温暖化とともに細石刃石器群に土器が伴うようになり、その後新石器文化に移行していく。この時期には石刃鎌が西シベリアあたりから伝播した可能性が指摘される。日本列島においても同じ傾向があることは明瞭である。このことは石器製

作技術ばかりではなく、背景となる環境や生業形態も共通していたことを示している。

アンナ V. スモリヤーク氏

(ロシア科学アカデミー民族学人類学研究所)

「アムール川流域とサハリン先住民の民族起源と社会史」

アムール川下流域及びサハリンの民族起源の研究は、ロシアでは19世紀から行なわれていた。この地域に人が住み始めたのは中石器時代から新石器時代である。その後、西方、南方、北方から幾度となく人びとは移住を繰り返した。その人びとは、既にそこにいた住民の文化を取り入れて自然環境に適応し、その土地に同化していった。そのため長きに渡って信仰や習俗、言語などに土着の文化を残していた。そして、これらの文化は世代から世代へと受け継がれ、この地域には多層文化が形成された。具体的に言語を例にとれば、ツングース系民族の言語には今に至るまでチュルク語、モンゴル語の影響がうかがえる。とくにもともとそこに住んでいた人びとの文化の痕跡は、物質文化を示す言葉として数百例ある。生業に関する言



葉だけでも300以上ある。そのような言葉はツングース以前の遺産を示していると思われる。

荻原眞子氏（千葉大学）

「トゥングース系諸族の英雄叙事詩

いわゆる北方トゥングースとアムール・トゥングースの比較研究の試み」

アムール・サハリン地域の諸民族固有の文化伝統には、スモリヤーク氏も指摘しているとおり起源を異にする様々な文化が認められる。つまりこの地域では、土着の基層文化のほかに北方トゥンゲースに共通する文化と、チュルク・モンゴル的な特徴や中国からの影響が濃厚である。

アムール・サハリン地域の文化の多源性は口承文芸についても現れており、特に神話の主要部をなしている固有の特異な伝承は、基層文化に属するものと考えられ、この地域のすべての民族において顕著である。これと対をなすのが英雄叙事詩である。具体的な例としては、男は「メルゲ（メルゲン）」、女は「ブジ」とする主人公が登場するアムール・トゥンゲースのナーナイの英雄叙事詩と、北方トゥンゲースであるエヴェンキのそれとに表れるいくつかの事象について比較する。

そうすると、それらの間には大きな違いがみられることが分かり、このことは、それぞれの民族文化の特質を考える上で重要な示唆になる。

臼杵 勲氏（奈良国立文化財研究所）

「ロシア極東の先史文化」

ロシア極東南部、沿海州とアムール川中・下流域の混合林帯における地域の、新石器時代以降、鉄器時代までを概観する。新石器時代のこの地域では、河川、湖、沿岸での漁撈に狩猟採集を加えた複合経済を行ない、定住性の強い生活をしていた。青銅器時代以降は、これに農耕と家畜の飼育が加わる。鉄器時代以降は交易のため毛皮獸の狩猟や、商品となる植物の採集が重要となった。のちに渤海や金などの国家が形成されるが、やがて中国国家機構への編入、交易の進展とともにない従来の自給的な生業形態は変容する。

青柳文吉（北海道立北方民族博物館）

「森林と疎遠な文化・親密な文化—北海道の擦文文化とオホーツク文化—」

北海道の先史文化において、とくに擦文文化では農耕が狩猟にとって代わるほどの位置付けがな

されていたと考えられる。狩猟獸の代表であるシカはこの時期ほとんど狩猟されない。このことは本州の農耕文化伝統の一つとしてあった、シカを神聖視する觀念が擦文文化の人びとに働いていたといえよう。そこで擦文文化を森と疎遠な文化と見た。

擦文文化の後半ではオホーツク文化の影響も見逃すことができない。本来オホーツク文化は漁撈海獵を生業としているが、この時期陸獵を盛んに行なうことから、北海道東部のオホーツク文化を森と親密な文化と見た。

切替英雄氏（北海学園大学）

「アイヌ語におけるpa（パ）とca（チャ）の言語地理学的研究」

アイヌ語の方言には「pa」と「ca」の対応関係が認められる。「口」を意味するアイヌ語は、胆振地方、石狩北部ではparo、日高、釧路、北見東部ではcaroである。

地名にみられるparとcarの分布をみると、北海道西南部、石狩、胆振ではpar、釧路、根室、十勝、北見ではcarとなる。他にも、paとcaが表れる言葉の地理的な分布を総合すると、前者は胆振、日高西部、石狩に、後者は日高東部、十勝、釧路、北見、天塩ということになる。ここにはpaとcaが混ざりあうといった例外があり、名寄と旭川のように、明治時代の2地域の密接な関係が言葉の借用関係になった。

（学芸課 青柳文吉）



企画展

「オホーツク文化・調査最前線」について

1993.11.2~14

当館では、調査研究事業の一環として、平成3年度から今年度まで継続してオホーツク文化期の遺跡調査を実施してきました。この企画展は、その成果の一部を出土遺物と写真パネルでお知らせしようというものです。また併せて、ここ数年間に、各地で行なわれたオホーツク文化期の遺跡調査の成果についても紹介しました。

すでに当館の「博物館だより」で紹介しているところですが、当館では湧別町の川西遺跡においてオホーツク文化期の集落跡を調査してきました。毎年豎穴住居跡1か所を調査し、これまで3か所を調査完了したところです。この遺跡はオホーツク文化でも後半の時期、北海道東部に特徴的な貼付文土器を伴う集落跡です。調査した住居はことごとく火災にあって焼け落ちたものでした。このため住居跡から出土する土器や石器、骨角器などの大半は強い熱をうけて、変形したり変色したりしています。また、地面を1メートル近くも掘って床をつくるのがオホーツク文化の一般的な豎穴住居ですが、川西遺跡における私たちの調査ではこれ以外に、深い掘り込みをしない住居があることがとらえられました。平地住居（あるいは掘立て住居）にきわめて近いものといえましょう。これらの記録整理を含めて、調査研究はまだまだ先に続きます。本展示では、火熱をうけた土器、骨角製品、炭になった木製品などを展示しました。

このような当館の成果展示に併せて、枝幸町目梨泊遺跡、常呂町栄浦第二遺跡および同常呂川河口遺跡を紹介しました。

目梨泊遺跡は、かつて北海道大学によって調査されたことがあります、今回借用した資料は枝幸町目梨泊から浜頓別町斜内にかけての国道238号線の改良工事にともなう事前の調査によるものでした。調査は、平成2年から3か年にわたって枝幸町教育委員会によって行なわれ、住居跡、墓地が調査されました。

これまでのオホーツク文化の遺跡における調査

は、豎穴住居や墓のいくつか、あるいは貝塚の一部が対象となっていました。ところが目梨泊遺跡では住居跡や墓地の周囲も発掘されたことによって、住居と墓地との関係や、それぞれの住居の関係と墓のまとまり具合、遺跡と地形との関係などが具体的に分かってきたといえるでしょう。遺構には遺物が豊富にともなっています。とくに伸展葬をおもわせる墓からは、太刀、小刀、鉢、土器など副葬品が豊富です。本展示では、蕨手刀、土器など墓からの出土品と青銅製の帶飾、耳環を紹介しました。

常呂町の栄浦第二遺跡を含む「常呂遺跡群」は、オホーツク海に沿って東西にのびる砂丘の2,000を越える豎穴住居跡群をさしています。ここは昭和49年に国の史跡として指定をうけています。調査は史跡の中を通る道道サロマ湖公園線の拡幅工事に伴う事前調査で、常呂町教育委員会によって行なわれました。オホーツク文化期の住居跡の一部と墓が発見されています。おなじ常呂町の常呂川河口遺跡は、栄浦第二遺跡から3kmほど離れた常呂川河口部にあります。河川改修工事の事前調査として、昭和63年から常呂町教育委員会によって調査が行なわれてきています。3か所のオホーツク文化期の豎穴住居跡が調査されていますが、なかでも床面の長軸が12メートルを越える火災にあった大型住居が注目されています。本展示では墓に伴う土器や小刀、住居跡から出土した土器や骨角器を展示しました。

（学芸課 青柳 文吉）



○平成5年度第4回講習会 北方民族の染色について

講師／齋藤 玲子（当館学芸員）

10月17日に開かれた講習会では、北方地域の染色文化について概観し、その応用として実際にケヤマハンノキで毛糸を染める実演を行いました。以下にその概要を記します。

北方地域の民族は、衣類をはじめとするさまざまな生活用具に、獨特な色使いをしている。それは、交易で得たビーズや布や刺繡糸を取り入れるだけではなく、毛皮の濃淡を利用したり、染色を施すなど伝統的に行われてきたものである。

染色される材料は主に、毛皮や鞣めし皮などの動物性纖維で、染色することによって皮を美しくするだけではなく、丈夫にする作用もあったと考えられている。また、アイヌの衣服やバスケットの素材として植物性の纖維も染められた。染料のほとんどは植物性で、ハンノキやカラマツなどの樹皮や、コケモモ、ガンコウランなどの果実は広く北方地域に共通して使われていた。

それぞれの民族には色に対するシンボリズムがあり、北東シベリアでは、「黒はあの世・死」で「赤は生命」「白はニュートラル」な色であるといわれ、死装束やシャマンの服などに反映されている。アイヌでは黄色を尊び、キハダで染めた黄色い文様の入ったござは特別な機会に用いられた。

以上のような内容を、スライドを用いて実物資料と照らしながら説明した後、講習会のはじめに染料に浸しておいた毛糸を取り上げました。これは、予想していた赤には遠く、黄味がかった茶色でした。しかし、参加者からは、色見本や北方地域の染料リストなどを参考に、自分でも染色の世界を広げてみたいとの声が聞かれました。



○平成5年度第2回講座 オホーツク文化・調査最前線

講師／青柳 文吉（当館主任学芸員）

企画展の開催に合わせ、最終日の11月14日にオホーツク文化に関する講座が開かれました。

はじめに、大正初期にオホーツク文化の遺跡として有名なモヨロ貝塚を発見した、初代網走市立郷土博物館長の米村喜男衛氏について紹介しました。米村氏がアイヌやウイルタ、ニブフなどの民族資料をも収集しながら、晩年は「網走に北方民族の博物館を」との構想を語っていたことなどをとおして、当館とオホーツク文化研究の関係について述べ、その後、研究の歴史について概観しました。以下に内容を記します。

オホーツク文化の発掘事例は限られており、遺跡数にして20か所から30か所で、同時期の擦文文化に比べると数分の一と、非常に少ない。昭和22~3年にモヨロ貝塚で初めて総合的な調査が行われ、さまざまな分野の専門家によって研究された。アイヌ文化期の前段にあたるいわば北海道土着の擦文文化の人たちとは、身体的特徴も生活様式も異なることから「オホーツク文化人はどこからきたか」が、当時からの中心的な研究テーマであった。

考古学において、発掘の成果はマスコミが報じるほどすぐには学問的に評価されるものではない。しかし、例えば、貝塚から発見される海獣や魚の骨、多数の鉈や釣針などの狩猟・漁撈具から、生業形態をはじめとする生活様式をうかがい知ることができ、また、本州の末期古墳時代（8世紀頃）に多く見られた蕨手刀のように、時代を決める手掛かりとなる資料もある。動物の頭骨をまつたと思われる場所や、擦文文化のものと融合した形式の土器や住居の出土により、精神文化や他の文化との交流も証拠づけられる。

スチールビデオや特別展示室で実際に資料を見て、「発掘調査～遺物から何がわかるか」という、入門的で興味を引き出すような講座でした。



本研修会は北海道教育委員会主催、(財)アイヌ無形文化伝承保存会の主管で開催されました。最初に(社)北海道ウタリ協会の野村義一理事長の「国際先住民年とアイヌ民族」と題した講演にはじまった研修には博物館・教育委員会職員、研究者、学生等全道各地から約80名の参加があり、当研修会に対する期待の強さがうかがわれる同時に、以下に紹介する主な講義では歴史のなかでアイヌ民族史はどうとらえられるかといった従来の考え方から一步踏み込んだ見解がいくつか示されるなど興味深く拝聴させていただいた。

アイヌ民俗文化財専門職員等研修会 10.18~20 於:札幌

北海道大学法学部の中村陸男氏は北海道旧土人保護法の制定背景やその後の法改正、道ウタリ協会が求めていいるいわゆるアイヌ新法、道が設置したウタリ問題懇話会提案のアイヌ新法の考え方等を解説された。渡辺仁氏はクマ送り儀礼について新たな解釈を含めた見解を、萱野茂アイヌ記念館の萱野茂氏は自らの生立とアイヌ文化への関わりを軸に沙流川流域の歴史と文化について述べられた。静修短期大学の関口明氏は古代蝦夷(エミシ)が北海道とどのように関わるか、また東北学院大学の榎森進氏は東アジア史のなかでアイヌ民族史をとらえる必要性を強調された。北海道大学の秋月俊幸氏は日本人の蝦夷地に対する領土認識の変遷をたどり、アイヌ政策に反映された日本人の特異な領土観を示された。(学芸課 渡部 裕)



海獣狩猟の展示に“アザラシ誘引具”という棒状の資料がありますが、具体的にどのような使われ方をするのか教えて下さい。

A この道具はアラスカ北部～中部のアイヌイトや北東シベリアのチュクチの人たちにみられるもので、氷上で日光浴をして休んでいるアザラシに近づくために使われていました。木あるいはセイウチの牙、カリブーの

角が材料で、先端が指状に2～4本に別れた形をしており、この先にアザラシあるいは鳥の爪がつけられています。しばしば牙製のアザラシ形彫刻がつけられたり、柄の部分にアザラシの顔が彫刻されています。

アザラシは警戒心が強く、春季、氷上に上がって眠るときも定期的に目を覚まし顔を上げてあたりの様子をうかがう習性をもっています。銃が普及していない時代、氷上で休むア

ザラシを捕獲するために狩猟者は時間かけて氷上をはってアザラシの至近距離まで近づき銃で捕獲していました。この接近の途中でアザラシに気づかれたとき、狩猟者はアザラシ皮の服や帽子でカモフラージュしてアザラシの仕種をしたり、この道具で氷を引っ搔くことでアザラシが氷を爪で搔く音をまねて、あたかも別のアザラシがいると思わせるのです。(学芸課 渡部 裕)

立教大学で行われた大会2日目に、スチュアート・ヘンリ氏(白百合女子大)が企画したシンポジウムが開催されました。「具体的な事例に基づいて先住民族政策を検討し、今後の政策立案に貢献するための出発点」と位置づけられたこのシンポジウムでは、カナダ、アメリカ合衆国、オーストラリア、ニュージーランドにおける先住民族政策とその課題、および日本のアイヌ語教室とアイヌ古式舞踊の歴史と現状が紹介されました。

ここでは、かつてイギリスの植民地だったカナダ第47回日本人類学会・日本民族学会連合大会

10.29～31 於：新座

シンポジウム「大地は誰のものか？先住民族と政策－日本の『国際先住民年』によせて

ダなど、当初から先住民族の権利がある程度認められている国で施行されている政策をそのまま日本で応用できるのかが検討されました。これに関して先住民族の復権を探るために「先住民族」と「国家」間の条約関係を3類型に整理する考え方が提案されました。また、カナダで99年に樹立されるイヌイットの自治政府「ヌナブート準州」に関する報告など、興味深い視点や話題がありました。主な発表題目：「ANCSAの内容と『アイヌ新法』の内容」小谷凱宣氏(名古屋大)、「カナダ・イヌイットが進めるヌナブート運動の現状と課題」スチュアート氏、「アイヌ民族への言語文化政策」中川裕氏(千葉大)。このほか細川弘明氏(佐賀大)、内藤曉子氏(立教大)、葛野浩昭氏(聖心女子大学)、大谷洋一氏からの発表、コメントがありました。

(学芸課 佐々木 亨)

寄贈資料紹介

○ナーナイ等の写真録音テープ

1950～70年代に撮影されたナーナイ、ウリチ、ニブフなどの写真167枚と、1972年に収録されたナーナイの口承伝承などの録音テープ11巻が、ロシア科学アカデミーのA.V.スモリヤーク氏より寄贈されました。

執筆者ならびに出版社から 贈呈をうけた書籍（10月～11月）

Black, Lydia T. *Glory Remembered: Wooden Headgear of Alaska Sea Hunters*, Alaska State Museums 1991

Смоляк, А.В. Этнические процессы у народов нижнего Амура и Сахалина. Наука 1975

Смоляк, А.В. Шаман: Личность функции мировоззрение. Наука 1991

主な来館者

- 10/19 神田信夫氏（明治大学名誉教授・東洋文庫研究員）ほか満族史研究会一行9名
- 10/23 全国博物館大会一行50名
- 11/13 佐々木高明氏（国立民族学博物館）他1名

観覧者動向 10月～11月

	常設展示
10月	4,012名
11月	1,377名

みんぞく

こうこ

はくぶつかん

in Hokkaido (10月～11月)

- 10/2 「木彫りの技・今に伝える」平取町立二風谷アイヌ文化博物館で現代の木彫展開催/D

10/5 網走市立郷土博物館で「最寄貝塚」展開催。函館市立博物館などの資料400点余を公開/DAB他

10/6 小樽の手宮洞窟・続縄文期「古代文字」の保存展示工事にさきがけ写真測量。平成7年には一般公開/D他

10/10 道立近代美術館で「手で見る美術展」開幕。帯広、函館なども巡回/D。

10/22 ユーカラを伝承指導・白沢ナベさん死去/D(タ)他

10/26 「国際先住民年ウイーク・イン北海道」が北海道・北海道教育委員会主催、北海道ウタリ協会の共催で25日から開幕。シンポジウム、映画上映会、アイヌ民族文化祭などの行事多数/D他

11/20 「フチの伝えるこころ～食生活から・冬編」(ヤイ・ユーカラの森運営委員・計良智子さん筆) 28日まで8回シリーズ/D

* AB 網走新聞
D 北海道新聞(オホーツク版)
複数紙掲載の場合、扱いの大きい方を紹介しています。

観覧料

一般	高校生・大学生	小学生・中学生
250(200円)	80(50)円	50(30)円

* かっこ内は10人以上の団体の場合

鳥居龍藏(1870～1953)は、東アジアにおける民族学、自然人類学、考古学研究の開拓者であり、わが国のこれら学問分野の先覚者です。1899(明治32)年の千島調査をはじめ、南北サハリン、アムール川流域、中国東北部、モンゴル地域などの調査で収集された資料をとおして、鳥居のみた北方民族を紹介します。

期間中の2月13日には、国立民族学博物館の大塚和義教授を招き、講演会『鳥居龍藏－人と研究』を午後2時から当館講堂にて開催します。

編集後記

今年の5月のことだった。札幌で偶然にも同じ宿に泊っていた千葉大学の中川裕先生から、千歳のアイヌ語教室に誘っていただき、飛び入りで参加させてもらった。その後、教室の主催者である中本ムツ子さん宅で、厚かましくも山菜をふんだんに取り入れた昼食をご馳走になった。

白沢ナベさんとお会いしたのは、そのときが最初で最後になってしまった。楽しそうに物語をお話しになられていた。アイヌ語で「おばあさん」を意味する「フチ」という言葉がやはりしつくりするので、はじめてなのに私もそう呼び掛けていた。

常設展示室にある1～10までの数を様々な言語で聞くことのできる装置の中で、一番多く押されるスイッチからは、今日もフチの声が流れてくる。

(齋藤)



鳥居が収集したナーナイの白樺樹皮製容器

第7回特別展

鳥居龍藏のみた北方民族

平成6年2月1日(火)～3月8日(火)

期間中の休館日 月曜日、2月15日